イタリア・ゴティックの彫刻家マルコ・ロマーノとその秀逸なる装飾性

團　名保紀

筆者は「芸術文化 22 号」(2017 年)で新発見の受胎告知彫像群をマルコ・ロマーノの 1330 年代の作と認定した。そして 14 世紀初頭、マルコのデビュー作の一つである、シエナ大聖堂正面壁裏面の婦人胸像の頭部ディアデーマに三つ横並びで二重円の装飾が登場し、1308 年ごろにはクレモーナ大聖堂正面壁前のプローティロ上の聖母像と聖イメーリオ像で、ギリシャ十字を想起させる五小円による幾何学的装飾が強調され、1312-14 年ごろカーゾレ・デルサのポッリーナ記念碑で六小円を内包する丸窓が出現、やがて 1330 年代の受胎告知グループで五小円や七小円による装飾を見るに至るまで、大小の円の組み合わせからなる幾何学的装飾パターンがマルコ作品で一貫して見られるのに注目させられた。とりわけ二重円や五小円のパターンに対しては、当時のシエナやクレモーナのギリシャ十字を表した銀貨から来る影響を考えたが、同様の装飾展開が 13 世紀末のシエナの代表的彫金芸術、「聖ガルガーノの頭骨容器」や 14 世紀初頭ポッジボンシの聖ルッケーゼ教会に於ける、メンモ・ディ・フィリップッチョ作画の幾多の聖人半身像を迎える衝立額としての木工芸術、またシモーネ・マルティーニらのシエナ派絵画の表面に施されたパンチ・マークにも登場しており、これらいわゆる「小芸術」へのマルコの鋭いまなざしを読み取ることもできた。だがそれらに対し、またマルコ作品の装飾自体に対し影響を与えた筈の 13 世紀後半の所謂「大芸術」も存在していた。即ちニコーラ・ピサーノのピサとシエナの説教壇、また同作者作のルッカ大聖堂正面壁のまぐさ、それらの浮彫に於ける建築表現、それにピサ洗礼堂外周部の建築装飾、そして 1265 年ごろのオルヴィエトの法王宮の丸窓、1287 年以降のジョヴァンニ・ピサーノによるマッサ・マリッティマ大聖堂アプス部外周の丸窓等であり、いずれもマルコが大小の円を幾何学的に組み合わせ展開する装飾に先行するものを見ることが出来るからである。ローマ出身の彫刻家マルコがシエナ大聖堂を 13 世紀末初めて訪れた際、堂内のニコーラ作説教壇の先頭の浮彫場面「聖女エリザベッタとマリアの会見」、その背後の神殿破風に施された、ギリシャ十字を想起させる五小円が大円内に収められる明晰な装飾パターンに注目した筈である。そして同大聖堂正面壁上に設置されるジョヴァンニ・ピサーノ作ソロモン像の豪華な衣装表現にも同様の五小円パターンが繰り返されるのに気づき、ピサーノ父子によるそれらの装飾が当時のシエナの銀貨のモティーフを反映、いずれも富と華麗の象徴として採用されたものとマルコは理解、自らの新世紀初頭からの彫刻作品でコインに関連するモティーフを積極的に反映して行ったものと理解される。またニコーラ作シエナ説教壇のレリーフ「エジプトへの逃避行」のロバに乗る聖母マリアの衣装に施される六小円を内包した円を、マルコはやがてカーゾレのポッリーナ記念碑の建築装飾として採用し、やはりニコーラ芸術の装飾面に対するマルコの関心をうかがい知ることが出来る。だがイタリア・ゴティック彫刻の偉大な開祖ニコーラに関する彫刻家マルコの理解、尊敬はニコーラの代表作ピサ洗礼堂の 1260 年完成との年記を示す説教壇、その完璧な美、力強さを直接目にし一層総合的、本質的なものになった筈である。ニコーラの

ピサ説教壇、その革新性、英雄性は13世紀初頭に亡くなったカラブリアの修道僧フィオーレのヨアキムの預言による愛、自由、友情満ちる「第三の段階」、即ち人類史に於ける父と子に続く聖霊、即ち「第三の段階」が開始される年とされた1260年の到来を祝う記念碑であったことに起因することをマルコは理解、例えばもともと装飾に関心の高かった彼は第三のレリーフ「お宮参り」の背後の建築表現に注目させられた筈である。左右対称的なそのバルダッキーノは三つ連続する半円形アーチによる下層部と、ドームを伴う三つの礼拝堂的形体を互いにつなぐ左右の三連続アーチによる上層部で形成され、下層の三アーチと上層全体の基底線とに挟まれる二空間ではそれぞれ大円の中に小円が三つ穿たれ、また大円の周りにも三小円が穿たれていた。要するにバルダッキーノ全体が三という数で支配されていたのであり、マルコはこうした点に聖三位一体ならびにヨアキムの「第三の段階」の象徴を読み取った筈である。そして同時期ピサ洗礼堂外周部でも、またルッカ大聖堂正面壁レリーフでも三という数を強調した優れた建築・装飾的モティーフをニコーラが精力的に展開したのを認識する一方、ルッカで登場する七つの小円を内包した大円により花を想起させる装飾、フィオーレ(花)のヨアキムの象徴記号とも思われるものを新出の1330年代の「受胎告知されるマリア」で効果的に採用して行ったのである。

マルコのデビュー作、1301年ごろシエナ大聖堂正面壁裏に設置したシエナの女神胸像のディアデーマには1300年代の象徴として、また当時の銀貨の二重円的形状の反映たる横並び三つの二重円が装飾されたが、法王ボニファーチョ八世の呼びかけによる1300年の大聖年を祝い、さらにヨアキム的年号1260年から数え40年、父と子の段階に続く「聖霊の段階」への思いが再び社会に高まる中、「第三の段階」の象徴的記号としてマルコにより考案されたものと思われる。実はピストイアの1301年完成、ジョヴァンニ・ピサーノ作説教壇では同じく正六角形プランによるニコーラ作ピサ説教壇と同様に随所に三という象徴数が強調され、しかも中心柱の上方で「父と子に続く聖霊の段階」を象徴する各人面が浮彫されていた。マルコによる横並び三つの円による装飾の影響は大きく、例えばアレッツォ大聖堂内の1302年ごろのガーノ・ディ・ファーツィオ作「法王グレゴリオ十世の墓」で、聖三位一体を象徴する三円柱が石棺の前を支えた。またマルコはカーゾレのポッリーナ記念碑でポッリーナの立像を二等辺三角形構図の頂点に、そして老若の預言者立像を左右下方に置き、フィオーレのヨアキムによる「第三の段階」を象徴したと考えられる。そしてこうしたポッリーナ記念碑はティーノが1315年完成する皇帝ハインリッヒ七世の墓の付属祭壇上の三立像彫刻、その水平的設置、即ち聖バルトロメオ像を傭兵隊長父子像が左右に挟み、父と子に続く「聖霊の段階」の象徴としたことに対し、水平に並ぶ三円で「第三の段階」を象徴したシエナ大聖堂正面壁裏の女神像頭部装飾と相携え影響したものと考えられる。

優れた装飾が時として美術史の重要な流れへの強い原動力として貢献することを我々は今認識する一方、優れた装飾の実践者、開拓者であった彫刻家マルコ・ロマーノの魅力、特性、影響力の大きさについて認識させられよう。